海辺・川辺調査レポート

■ 名　前（ふりがな）	石川　駿
■ グループ名	
■ 学校名	粕川小学校
■ 学　年	５年
■ 年　齢	
■ お手伝いしていただいた方の名前	

■ レポートした場所	
■ レポートの題名	「吉田川のむかし」について
■ 内　容	**吉田川の位置**：北泉ヶ岳を水源としています。宮城県のほぼ中央を西から東に流れています。河口より 800 メートル上流で鳴瀬川と合流して、太平洋に注いでいます。長さは約 37 キロメートル。 **自然と生き物**：水源では、ツキノワグマ・かもしかなどの野生動物。吉田川には、サケ・かえる・イタチ・たかなどがいます。時々、きつねやたぬきなども見かける事があります。かわせみやゲンジボタル・マガン、冬には白鳥もやってきます。

吉田川の歴史

　鳴瀬川からの逆水で水害が多く、人々を困らせていた。そこで、干拓工事がすすめられた。

元禄６年～１１年・元禄潜穴

工事は、松島丘陵の下にくぐり穴をほって、沼の水を高城川に流すという方法で進められました。まず、いくつかのたて穴をほり、それらをつなぐように横の穴をほっていました。工事の道具としては、つるはし、くわ、土をほるためののみ、土を運びだすもっこなどが使われたと思われます。

江戸時代になり、仙台藩では品井沼を干拓して新田を開発しようと考えました。そのための調査が 1674 年（延宝 2 年）から始まり、14 年間で 3 回行われました。また干拓するのに必要な道具の準備などで 5 年かかりました。そして 1693 年（元禄 6 年）、いよいよ工事が始まったのです。

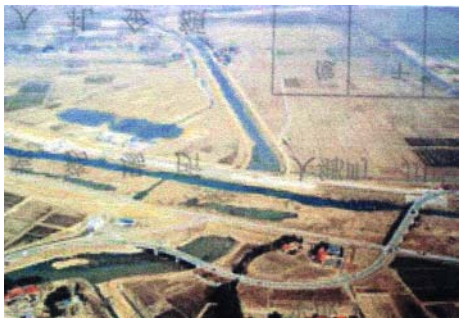
← 元禄排水路くぐり穴入口

明治潜穴

明治末

洪水を松島湾に流すためにつくられた。

大正末から、昭和 15 年ころ：品井沼と鳴瀬川を分離する工事。鳴瀬川の洪水が逆流するのを防ぐ工事。吉田川と立体交差する幡谷サンフォンの設置。



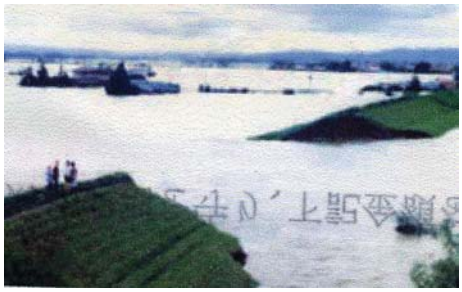
空から見たサイフォンと新吉田川

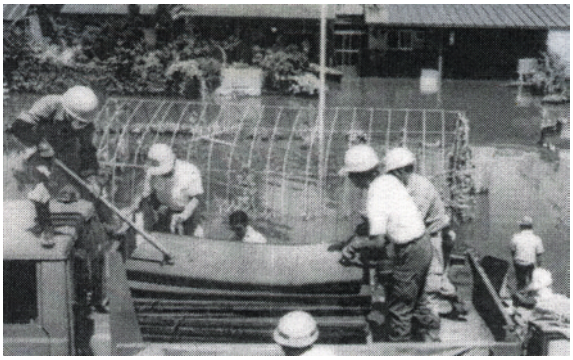
鶴田川を吉田川の下で通す幡谷サイフォン。この先が高城川の流れになるんだよ。

吉田川の大洪水

- 昭和 23 年　アイオン台風
- 25 年　豪雨
- 29 年 9 月　台風 15 号
- 31 年　大雨　吉田川右岸　けっかいかんすい
- 32 年　大雨洪水
- 33 年 9 月　台風 21 号　大洪水、台風 22 号　大洪水
- 35 年 10 月　大雨　鶴田橋落下
- 49 年　大雨　粕川大橋付近で、車が流され 1 人死亡
- 61 年 8 月 4～5 日　台風 10 号

吉田川左岸が切れ、鹿島代町志田谷地と三十丁が 1 ﾒｰﾄﾙ以上の浸水。





吉田川のそばで暮らす人々のようすと願い

吉田川の支流で、家のわきには排水路が流れて、そこは生活の中で多くつかわれていた。

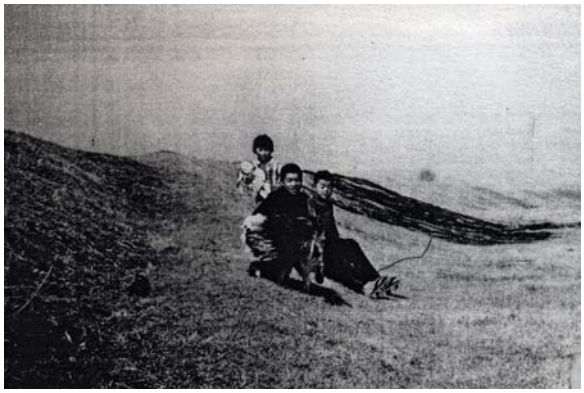
- 野菜、食器を洗う。
- 洗濯をする
- 牛や馬を洗う　　など
- 吉田川で夏には子供達が水遊び
- 川にしかけをして魚をとる

今は琲水路はなく、各家庭の自家水や町水道を利用しています。

大雨の時に備えて

中粕川、石原、丸山には何件かで 1 隻、土手崎は家ごと川舟を持っていた。大雨になると消防団が出動する（粕川と志田谷地が合同）

- 半しょうが打たれる
- 男は土納を運び、堤防のけっかいを防ぐ
- 女は重石のかわりに堤防に身をふせる
- 残った老人はにぎりめしを作る。



昭和 40 年頃の堤防とこども（お父さんとおじさんの小学生のころ）

土手崎の沼

昔土手崎には三つの沼があった

- 上沼・長沼・下沼

  田んぼに水をひくのに役立っていた。この沼には魚や植物なども多く、生活には大変役立っていた。夏には子どもたちが水あそびもしていた。しかし、深い所へはいけず。「沼に主（大うなぎ）がいてさらわれる」という伝説があった。

ねがい

　ぼくが住んでいる三十丁は、昔から水害が多かった。水害をなくすために昔の人はいろんな苦労をしていました。すごいと思いました。ぼくが生まれるちょっと前にもすごい水害があったのも知りました。昔の堤防の様子の写真は、その時洪水でぬれてしまって一枚もないそうです。大洪水のあと、今の堤防が昔の倍の高さになったそうです。ちゃわんやせんたくを川の水でするのはちょっときたないと思いました。でも昔の人たちは、水の神様が水をきれいにしてくれると信じていたそうです。学校の河川清掃でゴミ拾いをするといろんなゴミがあります。昔は今よりきれいだったんだろうと思いました。水害のない、きれいな吉田川でいてほしいと思いました。